

第 148 回 『わかるように伝えていますか』

坂井 聡

今回はニューロダイバシティー（神経多様性）について考えてみたいと思います。ニューロダイバシティーは、発達障害や学習障害、自閉スペクトラム症（ASD）などを「障害」としてではなく、人間の多様性の一部として捉える考え方です。この概念は、脳の機能や思考プロセスの違いを否定するのではなく、むしろそれを尊重し、社会全体が多様な個性を受け入れるべきだという理念に基づいています。つまり、障害を医学モデルでとらえるのではなく、社会モデルでとらえる考え方です。ということなので、教育現場や福祉の現場で行われているソーシャルスキルトレーニング（SST）には、ニューロダイバシティーの理念と矛盾する側面があるのではないかと考えることがあります。

ソーシャルスキルトレーニングは、発達障害のある人に対して、社会的な場面で、適切とされる行動やコミュニケーションスキルを教えるプログラムではないかと思うのです。例えば、相手の方を見て話す、場の空気を読む、適切なタイミングで発言するなどのスキルが挙げられると思います。これらのスキルは、社会的なルールや慣習に基づいており、主流社会において「普通」とされる行動規範に適応することを目的としているのではないかと思うのです。しかし、このようなアプローチは、ニューロダイバシティーの理念に反する可能性があるとも考えられます。

ニューロダイバシティーの観点では、発達障害を持つ人々が「主流社会」に適応するために無理をするのではなく、社会の側が多様な人々のニーズや気質を理解し、受け入れるべきだと考えるからです。ですから、ソーシャルスキルトレーニングが「主流に合わせる」ことを強調しすぎると、個々の特性や独自性を否定し、同調圧力を生む可能性があると思うのです。例えば、ASD のあるひとの気質として多く見られる「目が合わない」という行動は、本人にとって自然なコミュニケーションの形であり、無理に矯正しようとすることはストレスや自己否定感を生むことがあるのではないのでしょうか。

さらにソーシャルスキルトレーニングが「正常」とされる行動や価値観を押し付ける場合、それは本人の主体性や自尊心を損なうリスクを伴うのではないかと考えることもあります。特に、発達障害のある人が「普通」に振る舞うことを求められると、自分自身の気質を否定し、社会的な期待に応えるために過剰な努力を強いられる「マスキング」と呼ばれる状態に陥る事があるのではないかという事です。マスキングは、短期的には社会的な適応を助けるかもしれませんが、長期的には精神的な疲弊や燃え尽き症候群、うつ病などのリスクを高める可能性があるという研究もあるようです。

このような矛盾を解消するためには、ソーシャルスキルトレーニングのアプローチそのものを再考する必要があると考えています。例えば、個々の特性を尊重しながら本人が、ストレスを感じずに社会と関わる方法を模索する支援が求められると思うのです。また、社会全体の意識改革も必要です。ニューロダイバシティーの理念を普及させ、多様な行動やコミュニケーションスタイルを「異常」ではなく「個性」として受け入れる文化を育むことが重要だと思うのですが、皆さんはどう考えますか。

～坂井 聡先生のご紹介～

《プロフィール》

香川大学教育学部卒業。金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など、養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部教授。1997 年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。自閉症スペクトラム支援士エキスパート、特別支援教育士スーパーバイザー、言語聴覚士。